

外山夫妻一行が今年の「サッチモの旅」から帰国した8月8日、ニューオーリンズ「タイムズ・ペキューン」紙のシーラ・ストラウブ記者(写真)がタイムリーに同紙電子版に掲載してくれた長文のコラムを外山さんの翻訳で掲載させて頂きました。

長年にわたる外山喜雄・恵子夫妻の サッチモ、ジャズ、ニューオーリンズへの愛を語る



外山喜雄さんは2015年7月30日(木)、ニューオーリンズのランディー・ウォーカー高校で夏季練習中の生徒たちのために演奏し、日本から同行のツアーの一行とともに学校での行事に参加して、楽器を寄贈した。
(タイムズ・ペキューン紙、シーラ・ストラウブ記者、photos by Brett Duke)

バンドとWJF会員らとともにやってきて 感謝の気持ちを込めて子供たちに贈る



寄贈された楽器(写真下)をローリンズさんに手渡す外山喜雄さん(写真上)

毎年、外山喜雄・恵子夫妻はサッチモ・サマーフェスト出演のためにニューオーリンズを訪問し、必ず彼らのトラディショナル・ジャズバンドと日本ルイ・アームストロング協会のメンバー、そして贈り物をもってやってくるのが恒例になっている。今度もそれには変わりなかった。

ランディー・ウォーカー高校のバンドルームで行われた楽器贈呈式を待つ間、私は机の上に置かれた寄贈用のトランペット数本、トロンボーン、そしてバンジョーよく調べてみた。すべての楽器にメッセージが添えられていた。

「この楽器はワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション(日本ルイ・アームストロング協会)Tokyo, JAPAN から贈られました。ニューオーリンズとサッチモ、そしてあなた方の国が私たちに贈ってくださったジャズへの感謝の気持ちを込めた、日本のジャズファンからニューオーリンズの子供たちへのプレゼントです」

このメッセージこそ、まさに外山夫妻のすべてを物語っている。

毎年夏、私は外山喜雄とデキシーセインツが、この高校でいつも素晴らしいショーを見せてくれるのを楽しみにしている。ショーのフィナーレは必ずセカンドラインのパレードになる。子供たちはみんな夫妻が大好き。そして夫妻の、ルイ・アームストロングとジャズ、そしてニューオーリンズに捧げる愛情が、彼らに伝わっていく。



夫妻に名誉ある同校スタジアム・ジャンパー… 「どんなに私たちが感謝しているか分かって！」

贈呈式の中で、バンド・ディレクターのウィルバート・ローリンズさんから夫妻に驚きのプレゼントがあった。名誉ある同校の頭文字をデザインしたスタジアム・ジャンパーだった(写真上)。

「いつも私たちにプレゼントを持ってきてくれて有り難うございます。私たちがどんなに感謝しているか、分かって頂きたいのです」。以前、アルジェ地区にあった2つの高校が合併する前にも、当時のオー・ペリー・ウォーカー高校のジャンパーをローリンズさんが贈呈したことがある。その時と同じように、喜雄さんは今回も贈呈式が終わるまでずっとこのジャンパーを着続けていた。

ニューオリンズで暮らし帰国後WJFを設立し トランペッターと指導者は特別な絆で結ばれた

挨拶に立った外山さんは、第9区にあったカーバー高校で2003年に初めてローリンズ先生に会ったときのことを話した。ローリンズさんは同校のバンド・ディレクターだったが、2005年ハリケーンで堤防が決壊し、学校は水没してしまって同校を離れた。2

003年の訪問では、外山さんは同校に生徒たちのために39点ものピカピカの新しい楽器を持ってきてくれた——トランペットからチューバまであらゆる種類の楽器だった。

彼は、当時カーバー高校の生徒たちが使っていた楽器がボロボロだったので、驚かされたと語る。

「楽器のピストンがみんな壊れていたんです。この世で初めて、世界にスイングすることを教えた街です。そこでこんなことがあるなんて…。レイ・アームストロングと一緒に、皆さんが造りだした音楽に世界中がトリコになったんですよ」と彼。

私はその日のことも、楽器のこともよく覚えている。どの楽器を見ても、ほとんどがひもや粘着テープで補修されていた。その日、私は初めて彼がトランペットを吹き、



尊敬してやまないレイ・アームストロングのしわがれ声で歌うのを聴いた。その最初の出会いで、私はこの日本のトランペッターと、ニューオリンズのバンド指導者が特別

の絆で結ばれていることを直感した。音楽が若い人たちの人生を変え、救うこともできるんだという信念で、2人が結ばれているのだということ。

そして、それは私が初めて、なぜこの夫妻がニューオリンズで暮らすようになり、なぜ日本レイ・アームストロング協会(ワンダフル・ワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF)を立ち上げたのかを知るきっかけでもあった。



ジョージ・ルイスの音楽に心を奪われた若い2人 ジャツフェのアドバイスで素晴らしい冒険の旅へ

夫妻がまだ大学生のミュージシャンだった1963年にこの物語が始まる。著名なクラリネット奏者のジョージ・ルイスがプリザベーション・ホール・ジャズバンドとともに日本を演奏旅行した年、若い2人はジョージの音楽に心を奪われた。

「そんなにジャズが好きなら、ニューオリンズへ来るべきじゃないの
かって、バンド・マネージャーのアラン・ジャツフェが言ってくれたのです」

大学卒業後に2人は結婚し1968年、ジャツフェのアドバイスに従って彼らは素晴らしいアドベンチャーの旅に出た。住んだのは、バーボン・スリートにあった、ソニー・ボークレサン(外山注:クレオールの名士。息子さんが経営するボークレサンのソーセージ店は現在も有名)が経営する「カフェ・クレオール」のアパートの3階に入居した。

「窓は壊れていて、夜ともなるとプリザベーション・ホールからの音楽が聞こえてくるんです」と喜雄さん。

喜雄さんのトランペットの練習と恵子さんのバンジューの演奏が壊れた窓から外に流れていって、それを耳にしたボークレサンから、もしカフェの中庭で毎晩やってくれたら出演料代わりに夕食を出してあげると言われた。「それ

で毎晩、私たちはクレオール料理を食べていたんです」と喜雄さん。

彼らは滞在中の5年間、ミュージシャンとして働き、プリザベーション・ホールでジャズの巨匠たちに学び、時には彼らとともにシットインさせてもらいステージにも立った。そして5年後、日本でトラディショナル・ジャズを演奏するために帰国した。

「ジャズは日本でとても親しまれているんです」と喜雄さん。

マルディグラの祭りへ

見た“ジャズの故郷”の荒廃

古い汚れた楽器で行進、子供達は拳銃を持ち…

20年後、マルディグラのお祭りを楽しむためにニューオリンズに戻ってきた2人は、高校のバンドが古い汚れた楽器で行進しているのを目にし、10代の子供たちが拳銃を持っていることを知ってショックを受けた。そこで彼らは、子供たちの手に銃ではなく、新しい楽器をもたせようとWJFを立ち上げた。「彼らがトランペットを手にしたら、ルイ・アームストロングのようになるかも知れないって思ったのです」と喜雄さん。それ以来、彼らは800点以上の楽器をニューオリンズの学校の子供たちに届けるなど、この街のために多くの素晴らしい貢献をしてきた。

今年のサッチモ・サマーフェスト開幕を翌日に控えたあの朝、セカンドラインを演奏しバンドルームを巡る彼らの行進を見たとき、彼らが47年もの間、ニューオリンズへの愛を強く持ち続けてきたこと、それがなんとも素晴らしいことだと思った。

「ここでやっていることは子供たちを何とかしたい。それがすべてなのです」とローリンズ先生はプログラムの最後に聴衆に向かって言った。「そして、まったく別の国からここに来られた素晴らしいご夫妻が、悪戦苦闘する私たちを助けてくださっているんです」。

父も愛し続けたジョージ・ルイスの墓前へ 賛美歌が流れ雑草を取り除く一行に感動

この日の昼下がりに、私は外山夫妻、それにグループの皆様方とジョージ・ルイスのお墓に出かけた。彼はミシシッピ河の西岸、ニューオリンズの対岸にあるグレットナ市の



マクドノビル墓地に埋葬されている。外山さんら一行は、ニューオリンズにやってくるきっかけとなった、このクラリネット奏者に敬意を払って毎年ここにやってくるのだ。私も、私の父のためにも是非、墓参に参加したいと思った。ジョージ・ルイスは父の大好きなジャズマンの1人だった。父と母は、毎年冬になると、イリノイ州の厳しい寒さを逃れ、ニューオリンズで至福の1週間を過ごした。毎晩2人はプリザベーション・ホールに通っていた。必ず最後にレコードを買って家に持ち帰り、翌年1月のニューオリンズ行きまで2人で楽しんでいただ



ジョージ・ルイスの墓前で賛美歌が演奏される中、草むしりをする参加者たち

だ。私は夏の間、玄関先から私の寝室に流れてくる、ジョージ・ルイスと“スイート・エマ”バレットの音楽を耳にして育った。私の大学時代のある年、父が、日本語が上の部分に書かれている1枚のポスターを家に持ち帰ってきたことがある。中央にはプリザベーション・ホール・ジャズ・バンドのイラスト。下の方に“ジョージ・ルイス——ニューオリンズ”の文字。私は40年後、外山夫妻と会って初めて、それがジョージの日本ツアーの際のポスターだったことを知った。

ジョージ・ルイスのお墓で、デキシーセインツは『主よ、御許近くに』と、ルイスの最も有名な曲の1つ『バーガンディー・ストリート・ブルース』を演奏した。

＜彼のクラリネットから流れる、優しく、魂のこもった、美しいサウンドよ、永遠なれ＞墓碑にはそう刻まれていた。そして、私たちがこの優しく魂のこもったクラリネットの曲に耳を傾けている間、ファウンデーショ

ンの一行が手を伸ばしてお墓に生えた雑草を引き抜いているのを見て、私は感動させられた。

初めて知った恵子さんとあのバンジューの秘話 せめて夫のバンジューに日本を見せてあげて！

お墓を後にするとき初めて知ったのだが、外山夫妻はジョージ・ルイスが埋葬された1969年1月の雨に濡れた朝方、その葬列に参列していた。また、恵子さんが演奏していたバンジューは、ジョージお気に入りのバンジュー奏者、ローレンス・マレローの未亡人から昔譲り受けた楽器だった。

「ローレンス・マレローが亡くなったあと、世界中のバンジュー奏者や収集家はそのバンジューを手に入れようとしていたのですが、夫人はどうしても手放したくなかったんです」と喜雄さん。それでも、未亡人のエロイズさんは、若い日本の女性がバンジューを探していることを知ると、それを恵子さんに譲ってくれたという。「ローレンスは、ジョージと一緒に日本へ行くことができなかったのです。だから、彼女は、バンジューにだけでも日本を見せてあげたいと思ったのです」と喜雄さん。

一行は次に、ミシシッピを越えてウエストエンドへ向かい、私も同行した。

亡くなった仲間のトランペッターのために… 遺灰を湖に撒き『朽ち果てた十字架』を演奏

そこでバンドは、4月に亡くなった仲間のトランペッター鈴木芳郎さんのために『朽ち果てた十字架』を演奏した。

「彼は本当にルイ・アームストロングを愛していたんです。私たちのもとを離れていくまで、彼は病床でルイの音楽を聴いていました」と喜雄さん。賛美歌の最後の余韻が漂う



鈴木さんの遺影の前に『朽ち果てた十字架』を演奏するセインツ＝ポンチャートレイン湖畔のウエストとエンドで

中、喜雄さんはこの友人の遺灰をポンチャートレイン湖に撒いた。「全部じゃないんですよ」と彼は笑いながら言った。「今夜、ミシシッピのリバーボート・クルーズの時のために少し残しておくんです」。

湖畔で彼らと別れる前、私は、アームストロングのたぐいまれな才能の発露とされる1928年録

音の名曲『ウエストエンド・ブルース』をバンドが演奏する

のを聴いた。「彼のジャズ・フィーリング、スイング感、ブルース・フィーリング——それらはすべて、時代を数十年も先取りしていたんです」と喜雄さん。「ルイの『ウエストエンド・ブルース』のイントロは、ロイ・エルドリッジやディジー・ガレスピーのようなトランペッターのスタイルに道筋を付けたのです」。

外山夫妻一行と別れたあと、この日の午後は雨の予報だったことを思い出し心配になった。でも、ふっくらした白い雲が湖上の青空を流れていき天気は崩れなかった。喜雄さんはきっと、ルイ・アームストロングがお天気も面倒見てくれた、と思っているだろうな、と私は考えていた。

サッチモ・サマーフェストが終わって彼と30人のツアーがニューオーリンズを離れようとしている月曜の朝、私は彼と話をした。前の晩にサッチモ・トリビュートがあって、彼はブリザベーション・ホールに出演した。「ホールに初めて行ったのはもう47年も前のことなんです。いろいろな思い出が、まるで洪水のように甦ってくるんです。まったく感激、ノックアウトでした」。

今度の訪問のハイライトは？との私の質問に、とても一つを選ぶことはできないというのが彼の答えだった。

「ホントに沢山のことがあったんです」と彼。「私たちが金曜日に演奏したライブハウスの『スナッグ・ハーバー』は超満員のお客さんでした。サマーフェストの会場、旧造幣局でも同じでした。みんな本当に私たちのために熱狂してくれました。皆さん、本当に温かく私たちを歓迎してくれたのです」

ミシシッピの川面にも鈴木さんの遺灰を散布 その瞬間に花火が炸裂「みんなサッチモが…」

日曜日の朝に開かれたセントオーガスチン教会のジャズミサは、彼の演奏する『この素晴らしき世界』で幕を開けた。

「みんな大喜びしてくれて、私たちも、本当に楽しい思いをさせてもらいました」。

私は彼に休みなしで4日間も活動したのだから疲れたのではないかと聞いたところ、彼はとても幸せで、寝るときも興奮していましたと答えた。

「これはハートがいっぱいの特別のジャズ祭なんです。そして、私たちが若かったときにとっても親切にしてくれたこの街に恩返しすることが、私達も大好きなんです」と彼。

蒸気船「ナッチェス」号のクルーズに乗船したことについて彼に聞くと、彼の話では、乗船したはじめの頃は雨が降っていて、バンドのデュークス・オブ・デキシールランドはダイニングルームで演奏していたという。「そこに入るには食事を取らなければならない。それで最初、私たちはバンドのいない外に座っていたんです。とつてもがっかりしました」と彼。でも、まもなく雨がやんで、クルーズの終わりの頃には、日本からのツアーのためバンドが外に出てきてくれた。

「私たちも加わって、大変なジャム・セッションになってしまったんです。楽しさいっぱいで危うく鈴木君の遺灰を撒くことを忘れそうになってしまいました

た」と彼。思い出して、慌ててボートの反対側に回り遺灰をミシシッピ河に投げ込んだ。「遺灰が川面に降り注いだちょうどその時、対岸のアルジェから花火が打ち上げられたんです。まるで彼の魂が私たちと一緒にそこにいるかのような感じでした」と喜雄さん。

「今年の私たちの旅

行はパーフェクトでした。すべて親父さん、ポップス(ルイ・アームストロング)が面倒を見てくれたんです」。



お断り: 写真はすべてタイムズ・ベキューン紙電子版からのもので、小見出しと写真説明は、編集のさい添付させて頂きました。